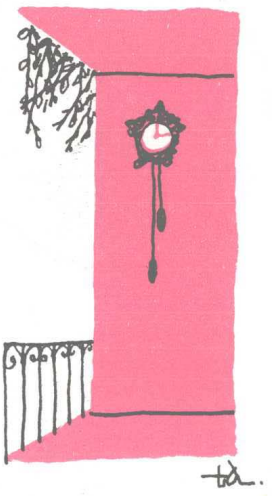
分類	0-0-93
製品	122597
出版	2253

(0)

二年目のふたり

森村桂



講談社

<同じ著者によって>
お嫁にいくなら（講談社刊）
Lサイズでいこう（講談社刊）
友だちならば（講談社刊）
ビジョとシコメ（講談社刊）
お隣りさんお静かに（講談社刊）
青春がくる（講談社刊）
おいで、初恋（講談社刊）
ふたりは二人（講談社刊）
結婚志願（講談社刊）
チャンスがあれば（講談社刊）
逢っているかしら（オリオン社刊）
天国にいちばん近い島（学研刊）

二年目のふたり

1968年11月15日　第1刷発行
1970年1月8日　第5刷発行

著　者　森村　桂

発行者　野間省一

発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21
郵便番号　112
電話　東京（942）1111（大代表）
振替　東京3930

印刷所　東洋印刷株式会社

製本所　黒柳製本株式会社

定　価　320円

Printed in Japan　© Katsura Morimura 1968
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

(分)0-0-93(製)122597(出)2253 (0)

二年目のふたり　目次

早起きは三文の得　8
ゴルフ、ゴルフ、ゴルフ　20
スワ、離婚　34
いざ、蒸発か　52
オフクロさま入院す　68
やってきたワタナベ氏　90
ああ、お手伝いさん　106

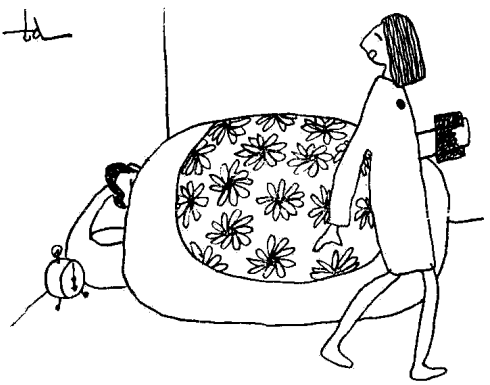
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

悦ちゃん大活躍 126
ダンナはもてたか、もてないか 148
カナダは遠い 166
家なき夫婦 192
ナベさんの友情 210
あとがき 227

装幀・挿絵　宮田武彦

二年目のふたり

早起きは三文の得



「え、五時半起き？　冗談じゃねえよ、勘弁してくれよ」

サクラテレビの早朝番組にレギュラーで出てほしいといわれたとき、私は、もちろんいちばんに我がダンナさまに相談した。

「そうね、やっぱり無理かしら？」

「お話にならないね」

「だけど、朝だけよ」

「何いってやんで。お前、俺が朝早い仕事に出るとき、起きたことねえじゃねえか、それが自分のとき起きられるか、俺は一家のあるじだぞ、だからしようがねえから行くけどよ」

「そんなこといったって、私、サラリーマンのとこ、お嫁に来るつもりだったもん」

「来たじゃねえか」

「違うのよ、サラリーマンていうのはね、毎朝同じ時間に会社に行くの」

そうである。私はサラリーマンの奥さんにどんなにあこがれてたか。私は原稿を書き始めた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

とき、そのときまで夜型だった。しかし、待てよ、と思った。私は将来サラリーマンと結婚する。そのとき夜型だったらすれ違いである。世のマスコミで活躍する女房さんは、月に一回だけ会うとかいってケロリとしてるけど、そして、しばらくたって女性週刊誌にデカデカとのって、「愛しているんだけど」とかいいながら泣いて離婚してるけど、私にはあの神経がさっぱり解らない。

私は何がなんでも奥さん業と両立させたい。じゃなきゃ、ダンナさまがかわいそうだし、文章に対しても「両立しないからやめます」じゃ申しわけない。

私は計画をたてた。ふつうサラリーマンは九時から五時までである。団地かどっかアパートに生活するとして、通うのに一時間、八時から六時まではダンナさまと泣いてお別れの時間である。ああ、何と貴重な十時間であるか。私は七時に起きる。起きてパッパと朝ごはんを作り、一緒に食べて八時におくり出して、あとかたづけ。トイレに行って、洗濯をしながら掃除をし、買物をすませてホッとするのが十時半。そこでお茶を一服のんで仕事を始める。十二時にインスタントラーメンでお昼を食べて、五時までびったり仕事。五時になったら夕飯の仕度、六時になったらケロリとした顔でダンナさまを迎えて夕飯、あとは十時までダンランの時間。

こういうふうに計画を立てていたのである。だから私は実行した。決して夜は書かない。いくら目がさえ、興奮し、イメージがどんどん湧いてこようと書かない。離婚する偉大な女流作家は多いけど、離婚しない中程度の作家は少ない。私は後者になろう。作家がなんだ、人間は幸せでなくちゃいけない。私しゃまず幸せな人間でありたい。歴史上の人物になったって、死

んでしまえば当人には解らない。それともう一つ、健康上の問題がある。私は身体が弱い。夜の仕事は禁物である。私はきびしくわが身をきたえた。学生時代、演劇部の台本だ、文芸部の雑誌に書くんだといっては、その度に徹夜していた人間が、ぴったり夜はやめたのである。

書き出して一年半、私は結婚することになった。

「結婚してからも書く？」

「うん、お願い」

「いいけど……。夜なのか？」

「ううん、昼間よ、会社に行ってる間」

「ほんとか？」

彼の目が輝いた。そしてホッとゆるんだ。彼も私も、どんなに〝昼間にきたえた〟ことを感謝したか知れなかった。万事は理想通りいったのである。

ところがである。現実とは何と皮肉なつむじ曲りであったろうか。私の夢は、計画は、そして彼の期待は、ガラガラとくずれ去った。

彼はサラリーマンである。月給とりさまであることは、ふつうのサラリーマンと変わりがない。しかし、ある日は朝の六時に出かけ、お昼すぎには帰ってくるとしたら、そしてある日はお昼に出かけ夜中の一時に帰ってくるとしたら、それも、せいぜい二週間先までの予定しか解らず、お昼に出る日はその三十分前までねむっていて、その前の日、午前一時に彼の夕飯を食べさせて、二時にねむった私が、何とか早めに朝の仕事をかたづけようとひとりフラフラフラ

リと起き上がってみたとする。
「何だよオ、もう朝かよオ」
とダンナさまのねむそうな声。
「うん、九時よ」
といえば、ダンナさま、
「なんだ、夜中か。静かにしろやい」
これじゃ、せまいアパート、ガタガタ雨戸あけたり、洗濯したりなんてできやしない。仕方なく私もねる。郷に入ったら郷に従え、水は器に従え、と私は昔学校で習った。
それでも十時には起きて、ごはんの仕度をして待っている。ダンナさまは一向に起きない。私はガタガタ掃除もできない。おつかいにも行けない。かといっていつ起きるか解らないとあっては、原稿用紙もひろげられない。
十一時半である。何回目かの
「朝よ、ねえ、朝だったら」
というのが、ついに、
「ねえ、お昼よ、もうすぐ午後だったら」
というのに、はじめてダンナさま目がさめる。
「何、昼か、大変だ。会社だ。お、めし、あ、先に便所行ってくる。新聞くれ」
そして十分後にはバスの停留所めがけてバカバカ走ってるとなれば、おかげでわが家はお昼

というのに、全くどこもかたづいていないとあれば……。やっとかたづいたのが二時か三時、買物行って一息つくともう四時近い。夕飯の仕度はせにゃならん、してしまうと五時。やっと原稿も書き出して、七時になるとオナカがすき、食べ終るとねむくなる。ダンナさまが帰るのは十時か一時か、それまでゆっくり原稿を書けるというものの、長年きたえたおかげで、私しゃねむい。それが何とかヒマをみつけ、早朝だろうと夜中だろうと書けるようになったのがつい最近。だけど、何となく落着かないのはこの生活。ヤクザだなあ、と思うのである。

やっぱり私は朝がいい。これからだ、と思う朝がいい。田舎の人は朝が早い。彼の母上さまも、畑仕事をするときは朝四時半とか五時に起きる。ふだんは六時だ。ニューカレドニアの怠け者の土人さんたち、彼らでさえ朝は六時だった。人間、朝の六時に起きて、夜の九時か十時にねるというのがいちばん健康な生活なんだ。電気代も安くてすむ。

そうとも、神さまは、人間に朝起きるように太陽を来させてくれた。いやがおうでも目がさめるようにだ。夜のままだったら起きても何も見えやしない。そして、夜ねるようにと太陽を帰らせた。

にもかかわらず、今は何だ。電気を発明したのはいい。ニューカレドニアだったら、星がいっぱい出て大きいから、お手洗いへ行くくらい、道をまちがえなくてすむし、どこでお手洗いしたって誰も怒りゃしない。

だけど、東京じゃ困る。こんなに家がゴミゴミしてるから、うっかり星明りをたよりにお手洗いしに行ったら、隣りの家の床の間だったってこともありうる。やっぱり電気は必要だ。

だが、テレビはいかん。何で夜中の十一時十二時、深夜放送までする必要があるか。おかげで家のダンナさまは夜中まで仕事だし、みんな夜中まで見てる。バーもしかり、十一時十二時とは何事か。食堂しかり、タクシーの運ちゃんしかり。夜の女性しかり、昼間、営業しなさい。受験生がいかん、何で夜中の二時三時まで勉強しなけりゃいけないのか。あなたは頭が悪いんだ。やさしいとこにしとけばいいじゃないか。おふくろさんが悪い。

「康雄はゆうべ二時まで勉強してたんだからそっとしときましょうよ」

ねぼけちゃいけない。

「恵美子はデートから帰ったのは十二時でしょ。九時まで起こさないでっていわれたから」

何をいっとる。親よ、しっかりせい。人間は朝起きるのだ。夜いくら遅かろうと、朝は起きねばならんのだ。朝いつも通り起きられないのなら、夜遅くまで起きてはいけない。

「フランスなんて、パーティーの日は十二時すぎに終るわよ」

さよう、終ります。一時二時のときはザラであります。しかしそれは年に一度か二度。しかも二時に終ろうと、みんな翌日はちゃんと七時に起きます。

「ねえ、起きなきゃいけないのよ、朝は。私もやるわ。もう一度人間らしい生活にもどらなきゃ」

「人間らしいって、オマエ、よ。今だって人間らしいじゃない」

「人間クサイの。人間らしくなきゃダメ。ねえ、ジロちゃん、ジロちゃんだって、私がもし七時から八時までのテレビに出るとしたら気になるでしょ」

「気になるって、まあ、な」
「としたら、私の出番の七時半には起きるって寸法にならない？」
「起きるって……、まあ、な」
「となれば、会社の遅い日以外は、十時頃にねむくなるってわけよ」
「まあ、そういやあ、な」
「ね、手を打とう！　三ヵ月だけ。二人とも人間らしい生活に立ちもどるのよ、ね」
「そんなに俺、ヤクザな生活だったかな。ま、やってみるか、オマエも太るかも知れねえし。俺、ほんというとグラマー好みなんだ」
そして私はめでたく、サクラテレビ出演とあいなった。七時から始まる番組のためには、六時までに行っていなければならない。幸い我が家からサクラテレビまでは、そのころの道路ならば車で五分で着く。私は五時半に起きればいいのだ。
「五時半ですか、私はいつも六時に起きておりますが、三十分早いだけですよ」
といってくれたのはパートタイムで通ってくれるおばちゃん。あとはみんな、
「やめなさい、五時半起きなんて。夜中じゃない」
「必ずまいるって、私でさえまいる。それをあなたは身体が弱いのに。原稿だってあるし、結婚までしてて」
というばかり。つまり、私は病気になるというタイコ判をおされて出社したわけなのだ。
たしかに五時半はねむい、まだ太陽さんはやって来ないし、ダンナさまもオフクロさまもい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com